

由農

地域を支える

農業人

WAZABITO

PROFILE

きむら りょうすけ

木村 亮祐 さん

KIMURA RYOSUKE

41歳

あま市乙之子

世界中へ魅力を届けて 歴史を繋ぐ

あま市乙之子でベゴニア類など、約2,000種類の鉢花の栽培を行う木村亮祐さんは、木村園芸として全国の各市場や香港、シンガポール方面への出荷を行っています。今年で就農から14年を迎える木村さんは花き農業を営む家系に生まれ、父が集めた多様な品種のコレクションを守り続けたいと思ったことをきっかけに、27歳の時に家業を継ぎました。現在は、あま市花き園芸組合などの組合に所属し、約1,300坪の圃場を管理しながら、家族と6名の従業員と共に通年で鉢花の栽培や出荷に取り組んでいます。

栽培に取り組む中で、海外から日本初の品種を導入したり交配や突然変異により新品種を開発しているため、前例がなく商品化に何年もかかる苦労もあります。そのため、仲間の生産者を頼ったり海外の文献を調べて試行錯誤しながら対処しています。また、昨年の冬場は夜温が低かったため悩まされることもありましたが、暖房機の時間帯を変更したりミストで空間湿度を上げて対応しました。夏場の高温障害には、昨年設置したミストを使用して気化熱で温度を下げるなどして対策しています。

木村さんの栽培する鉢花は、国内のお客様以外にも需要があるため、日本の消費者の好みだけに左右されない点が魅力です。また、日本に流通していない植物の魅力をお客様に伝えるために、販売時のプロモーションやポスターなども自ら作成し、販路を拡大しています。経営を続けていく上で、こだわりとして商品の単価に見合うだけのものを用意できるようにすることを心がけています。「父と分業をして、日本中を営業しながら積極的に販売することに力を入れました。また、自分が販売した商品が、どういったお客様が扱ってくれているのかを常に知るため商談会や花屋に足を運びます」と想いを語る木村さん。加えて、目的を明確にして栽培や出荷に取り組み、注力した分だけ形となつて返ってくる点も農業の魅力だと話します。

最後に「これまでの歴史や苦労を途切れさせないためにも、品種の

保存を続けていきます。また、この先も木村園芸の商品の魅力を伝えていきますので、ぜひファンになつてもらいたいです」とメッセージをいただきました。



木村園芸の
Instagramの
QRコード

